

わたしの聖戦

◎◎女性が働くといふこと◎◎ 39

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津江

新聞の死亡記事

日々うんざりするほどの情報が発信されている。

新聞、テレビ、ラジオ、インターネット、電車の吊（つ）り広告、町の看板、ちらし、DM、そして周囲のおしゃべり……

いつそのこと全部なくなったら、人はどうなってしまうのだろうか。禁断症状を起こすか静かな環境にほっとするか、はたまたあつさり慣れてしまいか、それが当たり前になるのか。今や情報とそれを伝える媒体は、社会を構成する重要なファクターであり、人間のあり方を左右するほど大きな存在になっている。

点にある。一度報道されたら、それが映像であれ文字であれ、「偽」であつても「真」になつてしまふ。私自身取材を受ける機会がときどきあるが、こちらの意図するところではない言葉が強調され、違和感を覚えた経験はしょっちゅうである。

若い人にとって情報は多ければ多いほど嬉しいかもしれないが、年をとるとむしろ情報がうるさく感じられる。ほとんど情報が信じるに値しないように思える。そうすると、新聞のなかでも人の「死亡欄」しか見ないという人が出てくる。よほどのことがない限り、信じられるのは「誰かが

死んだ」という事実だけ。確かにそうかもしれない。そんなことを考えながら死亡欄を見る。たまに知っている人の名があるし、ごく稀（まれ）には自分より年の若い人の計（ふ）報もある。しかし多くは80歳以上の高齢で

母親自身の社会的功績ゆえではない。本人でないにもかかわらず死亡の事実が公表されるのだから、「だれそれ」は相当の人物ということになる。死亡欄に載る人の基準みたいなものはあるのだろうか。



あり、日本が長寿国であることは、ここだけ見ても十分すぎるほど理解ができる。

また、しばしば「だれその母」との記載がある。死亡欄に掲載されたとはいえ、エライのは「だれそれ」であつて、その

不思議に思つて新聞社に問い合わせると、死亡の情報は、本人の所属する（していた）企業や団体から流れてくるという。企業のトップだったり大学の教授だったり、様々な分野の人がいるため、新聞社内各部署で掲載にふさわしいかどうかを判断するという。死亡欄の人物として取り上げるのに値するようになったら、詳細を確認することになる。詳細とは、死亡原因だったり、喪主名だったり、葬儀の場所だったりする。情報の出所はどこ

からでもいいが、掲載の決定は各新聞社に委ねられるということだ。したがって、ある新聞では掲載されているが、別の新聞には名がない場合もあるのだらうが、見ていると、ほとんど一致している気がする。

死亡した人の所属組織や家族から情報が流れてくるのだとすれば、場合によつてそれは一種の宣伝になる。会社の、あるいは大学の、あるいはある一族の。まったく知らなかつた会社名や本人の名を見て、はじめてそれらを知ることになるのだから、まさしく宣伝効果はあると思う。

何だか、死亡欄さえもともに受け止められなくなつてきた。まったく「正しい情報」とはいつたい何なのか、考えるほどにわけがわからなくなり、その解決のため人はさらに情報を求めるのかもしれない。

イラスト・三浦義雄